

明海大学不動産学部

不動産の不思議

第401回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

新型コロナウイルスの感染者数が増加しているため、なるべく家にいるようにしている。友人と会うために久しぶりに出掛けた際、不思議な建物を見つけた(写真)。木造

2階建ての建物で外壁は汚れていてベランダがない。木製建具もあるから古い建物である。アパートが多い地域だが、周りの建物とは造りが異なる。不思議な点を整理した。

1つ目は、入り口が3つあることだ。右に少しきれいな開き戸、中央に古びた開き戸、左には引き違いの



吉田 勝
不動産学部4年

屋根を2つ持つ家

入り口がある。広くない家の間口がすべて出入り口で、特に、右は親子扉になっている。左右の入り口前には植木鉢が置かれ、中央の入り口のみ使われているようだ。

2つ目は、屋根のかけ方だ。雨漏りを防ぐことや工事費を安くする観点から、1棟の建物の屋根は1つにすることが基本だが、2つの切妻屋根が付いている。降水時に中央の谷の部分に雨がたまり、雨漏りの恐れ

古い隣家をつなげ个性的に

がある。中央の壁樋で排水するが、合理的な屋根形状とはいえない。

3つ目は、混沌とした外観だ。屋根が2つあり、左右の色やデザインが異なることから、元は別々の家だったようだ。しかし、左右の境界を示すはずの屋根の谷の部分、戸袋や入り口の中心線上にあるなど、明確な区分線がない。開口部など立面の構成要素に統一感がなくバラバラ

うだ。

4つ目は、間取りの構成だ。左右はそれぞれ間口が1間半程度だから、6畳の部屋はとれるが、どんな間取りでどんな暮らしをするのか想像できない。

不思議がいっぱい

の住宅だが、どうやら、片方の家の持ち主が隣家を買取り、合体工事をしたようだ。左右の家の隣に最も近い母屋の間の水平距離が半間程度

あることから、2軒の隙間だった部分を利用して、中央の入り口や戸袋を増設したのだろう。今流行のリノベーションをしたことが、古い建物が現役で残っていることにつながっている。建物は昭和のレトロ感がある。特に、コンパクトでリズム感のある屋根や開口部の上の霧よけはチャーミングで、希少性が高い。霧よけは見付け寸法が小さく変形しや

すいが直線的な形状を保っている。サッシュも様々だから随時改修してきたようだ。劣化が進む外壁の改修時期だ。若者にとって古い建物は安く借りられる魅力に加え、セルフリノベーションが可能ならなお魅力的だ。不思議な所に住んでみたい好奇心もある。この建物を見てそんな気持ちになった。

【教員のコメント】

建物だけでなくそこに関わった人の歴史も語り掛けるような個性的な表情が若者の心を捉える。いたずらなのか偶然なのか共通するデザインはなく、手入れをしていないようで

気遣いはある。住人の奥ゆかしさが建築ストックを厚くしている。



別々の住宅を一つにした個性的な外観